

#### あたまを耕すー4

前回プリントを書いたのが5月22日でした。それからいろいろあって、なかなか続きを書かれませんでした。カレンダーを見て「あっと驚く為五郎」、なんと明日は終業式。休み前になんとか一本書いておきたいと思ったわけです。

このプリントの目的の一つは、物事を考える習慣を身につけようということでした。前回は、もう完全に忘れているでしょうが（あるいは読んでいないかも知れませんが）、人はまず外の世界を目や耳を使って知り、そのものの概念を生み出す。そして、その概念を言葉にして使うということを話しました。

今日は、この言葉というものについてもう少し考察を加えてみましょう（考えてみよう、ということ）。もし言葉がなければ、どうなると思いますか。それを考えるために、言葉のわからない外国にいきなり転送されたとしましょう。例えば、お隣の韓国の田舎に行くとしましょう。周囲の人は韓国語しか話せません。私はその言葉がわかりません。そうすると私は言いたいことが言えません。身振り手振り（ボディランゲージ）で、「腹が減った」とか「眠たい」とかこちらの要求を伝えることはできるかも知れませんが、本当の会話はできないので、ひとりぼっちになってしまうでしょう。ただし、日本語を知っているなら、心の中でこの言葉であれこれと考えることは可能です。



ここでさらにひどい状況を想像してみましょう。つまり、私は日本語もその他のいかなる言葉も知らない、という状況です。どうなるでしょうか。何かを考えることができるのでしょうか。言葉が知らなくても、目や耳は普通に機能するのですから、それらを使って外の世界の形や色や音を知ることができる。しかし、それ以上のこと、外にある森羅万象（しんらばんしょう。「存在する一切のもの」という意味）のなりたちや互いの関係については、わからないと思います。そうすると、私たちの生き方は、刺激と反応、つまり外からの刺激を受けて、それに対して何の考えもせずに反応するというものになるでしょう。こうして、マズローの言った生理的欲求と安全の欲求だけを満たしながら生きていく、すなわち動物と変わらない生き方をすることになるのでは、と思います。しかし、そのような生き方に満足できる人間はいません。

では次に、周囲を見渡して、そこにあるものを見て下さい。君たちはそれを見ると、それが何であるか、またどういう風にあるのかを表現するでしょう。例えば、机、パソコン、壁、となりの人が歩いている、犬が吠えている、などと。このことが何を意味するかというと、人間はこの世界にあるものを知ると、それぞれに言葉を当てはめて理解するということです。



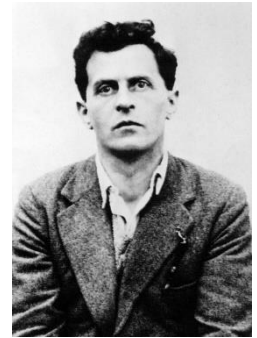
不思議なこととは思いませんか。「全てに名前がある」のです。ものだけでなく、動き（歩く、吠える）や感情（「悲しい」「嬉しい」「悔しい」）も言葉で表せます。あるいはさらに進んで、まったく見えないもの、例えば、「善い、悪い」「役に立つ、たたない」「価値がある、ない」というような価値、あるいは「親子」「友達」「先生と生徒」というような関係といったものも名前では表せる。

それだけでなく、人間には現実にはない世界を言葉で作り出すこともできます。例えば、「もし私

が沢山お金を持っていたら、学校に寄付するのに」といういわゆる仮定法現在の文章がそれです。

ここまで来ると、いやもうかなり前から「なんや、わけのわからんことを言わはるな」と腹を立てるかも知れません。本当は授業の中で話しながら説明すればいいのですが、今は文章で説明するしかないので、申し訳ありませんが、少し忍耐して読み続けて下さい。

ともかく、言葉というものは、世界に存在するものや人の心に存在するものを知り、表すために不可欠な（なくてはならないと言う意味）ものなのです。だから、ある人たちは、この世界がどうなっているのかを知るためには、人の使う言葉を研究すればよいと言いました（20世紀の分析哲学、有名な人がウィトゲンシュタイン（1889～1951）と言う哲学者です）。



しかし、言葉がすべてを表しているわけではない。簡単な例は月旦（げったん。人物の評価という意味）です。A君の人柄について議論したとしましょう。そして「Aは明るい奴だ」とみんなが結論したとしましょう。しかし、A君は明るい性格の人だと **ウィトゲンシュタイン** しても、きっと暗いときも、落ち込むときも、腹を立てるときもあるはず。人の性格全体を言葉で表すことは不可能でしょう。これと同じように、例えば「机」や「壁」とか、どんな言葉でも、それが示すものを完全に表しているのではないのです。では、言葉は何を表し、何を表すことができないのでしょうか。これは、実は普遍論争と呼ばれた、ヨーロッパの中世、特に12、13世紀に大きな議論を呼んだ問題なのです。この問題は言葉についての根本的な問題に触れているので、またいつか説明したいと思います。

今日のところは、普段私たちが何の疑問や困難も感ずることなく平気で使っている言葉というのが、実は以外とすごいものだと知ってもらえれば十分です。そして、こんなすごいものをほとんど無意識に使いこなしている君たちはなんて頭の良い者だ、と自信を持って欲しいです。さらに、暇があれば（きっといくらでもあると思います）、少しでも考えてみて下さい。「言葉って何だろう」「言葉が意味するものは何だろう」と。

ギリシア哲学の最高峰のアリストテレスは、沢山の至言（物事を上手に表す言葉）を残した人ですが、その中に「今も昔も哲学は驚くことによって始まる」というものがあります。この「驚き」とは後ろから友達に脅かされて「びっくりしたな、もう」という驚きではありません。人は毎日毎日繰り返されることを見ても、見慣れているので驚きを感じません。しかし、時々、私たちの住んでいる世界、私たち人間の能力や働きなどを見て、これは当たり前のことではない、すごいことだと感じることもあるでしょう。このような驚きこそ、哲学をさせるようになった、というのです。



おそらく歴史上、このような驚きを感じた人は少なかったし、今も少ないという気がします。だから、哲学者というのには「奇人」の類に見られるのでしょう。こういう驚きを体験するためには、「心の余裕」が必要です。そのためには仕事や勉強を休む機会がなければなりません。夏休みはそのためのよい機会です。自由にできる時間に何をするかを見れば、大体その人がどんな人かわかる。上手にこの自由な時間を使って下さい。

2015年7月16日、尾崎明夫